

# 原発事故から10年

## —子どもたちの通う道をととのえるために—

寄稿 鈴木 薫

認定NPO法人いわき放射能市民測定室たらちね・事務局長

福島第一原発事故から10年目—政府はありつけの権力を使い、風化しつつある事故の惨状を覆い隠し、なかつたことに対するかのように振舞っています。しかし、福島の「今」は確実に存在します。『いわき放射能市民測定室たらちね』の鈴木薫さんに、心情を綴っていただきました。



### 「野の道」

野の道をととのへよう 子らが行く路  
樹々もあれ、野の花々 かたはらに蜜も虫も

裸足よ歩けば ひたひたと 死んでゐるひとたち  
うたを唱へば かやかやと 未だ生まれぬもの等にも  
響き伝はる 生きてゐる音

野をならし 道をととのへよ  
子らが通ふ野の路 はるかむかうを見るあたり

たらちねには「野の道」という詩（うた）があります。これは、たらちね開所前から、測定をはじめとする様々な準備にかかわった遠藤藤一さんが、たらちねのハナ歌としてつくってくれたものです。たらちねのスタッフは、このハナ歌を思いながら日々、活動をしています。

ハナ歌というは、日常の中で手仕事をしながら無意識に口ずさむものです。私たち大人は、この「野の道」のように「子どもたちが通う道をととのえる」ことを何気なく無意識にできているのでしょうか？大人たちは、そんな世の中をつくれているでしょうか？



### Walk and Talk it

自分の「道」を自分で選ぶ企業があつて良いのではないか —『インファンル・アフェア』

香港ノワール作品『インファンル・アフェア』(2002年)が他のマフィア映画と異なるとされているのは、マフィアのボス・サムがスパイとして警察学校に送り込む青年ラウに次のようにいうところである。【「無数の兵の死の上に将軍は立つ」といわれる。俺はそうは思わん。自分の生死は自分で決めるべきだ。自分の「道」は自分で選べ】組織への忠誠心は必ずしも絶対でなくて良い、ということなのだが、後に警察内で出世したラウは実際に、自身の「道」のためにサムを裏切ることになる。

大手電力会社が政府や電事連から自立した人格を持ち、独自判断で原発を止めることはできないのだろうか、

という議論が2011年以降ずっとあった。四国電力の伊方原発で1月12日、制御棒1本が7時間誤って引き抜かれ、1月25日、ほぼ全ての電源が数秒間喪失、核燃料ブールの冷却が43分間停止したが、これだけのトラブルが起きても四電がその決断を下しそうな気配はない。無論日本において原発は長く「国策」であった。が、原発を保有する電力会社のうち一つくらい、自分の「道」を自分で選ぶ企業があつて良いのではないか。福島第一原発事故は電力会社が原発に見切りをつける絶好の機会だったはず。四国電力の幹部に「自立へのチャンスが訪れた」と感じ行動する者はいないだろうか。(TH)

Energy Autonomy

につながります。

放射能は測定しなければ可視化できません。たらちねでは、子どもの生活環境中の放射能の測定を行い、保護者に情報を伝えられよう努力しています。その測定値を見て、自分の子どもの安全を守る判断に役立てもらえたら良いと考えています。

保護者の中には、「学校から言わわれたら、スポーツ少年団から言わられたら、行かせたくないけど仕方がない」といって、放射線量の高い場所に子どもを行かせてしまう人もいます。それは福島県内では珍しい姿ではありません。また、他県の保護者から、学校の交流活動で自分の子どもを福島に行かせなければならず、心配だけれども自分だけが断ることができず苦しい、というお母さんからの話もありました。

社会のコミュニティの中で、絶対ではないけれども強制性のある指示に従わないことは、しがらみの中で生きる人々にとって苦しいことなんだと感じる局面が多くなりました。

原発事故後、問題の大きさに「自分の子どもだけ守ればいい」と割り切って、この9年間を過ごしてきた保護者も少なくないと思います。食べものや水に気をつけ、保養に行かせるなど、自分の判断でできることはやってきた、という人たちです。しかし、自分の子どもだけ守るという視野からの行動では、社会の大きなうねりが押し寄せた時、結局、強制性のあるコミュニティの圧力に従ってしまい、子どもを守りきれないのだという状況があります。

保養の説明会でも、「仕方がない」という保護者のあきらめの声を聞くことが多くなりました。このことから私は、一人の子どもを守ることも、大勢の子どもを守ることも同じことだと感じようになりました。大勢を守れなければ、一人を守ることはできません。逆に一人の安全を守ることができれば、大勢の子どもを守ることにつながります。

中途半端ではなく、本当に守りきることの意味は深く重いと感じます。そのことに大人が気づくことが大切だと思います。そうでなければ、子どもが被曝するというリスクを回避することはできません。

たらちねは双葉郡の高線量地域の測定をする時、マスクや手袋をつけ、足元の汚染にも注意し、被曝防護の備えをして行動します。しかし、その同じ場所で行われるイベント活動で、子どもたちが半袖半ズボンで動き回り、土埃の立つ場所でおにぎりを食べていることを考えると、言葉にならない恐ろしさを感じます。

福島県内では、国立高専がハブとなり、原発の収束作業・廃炉作業の専門家を育成するプロジェクトが組まれています。実業高校や大学なども参加しています。

同じプロジェクトが福井県でも展開されていると聞きました。福島県と同じく原発立地県です。原発の問題を日本全国で考え対応するのではなく、一部の立地県にのみ教育のシステムが強く組まれていることにも疑問を感じます。

そのシステムの中で子どもたちは成長し、電力会社に就職し、原発の収

束作業に関わる人もいます。独身のうちは大熊町にある寮に居住しなければならず、昼夜を双葉郡で過ごすことに危機感や違和感を感じることはあります。中には、予定よりも早くに結婚し、大熊の寮を出る人もいます。結婚すれば、大熊町に住まなくていいからです。

こういった実情は、近代的な日本の中でのこととは思えないと感じます。未来ある若者の被曝軽減への企業の取り組みと責任をどう考えているのか疑問です。

2011年3月11日のあの原発事故の時にあどけない子どもだった世代が、原発作業に従事し、私たちの生活の安全を支えています。その職業を選択する青年の中には、「誰かがやらなければ」「福島にある原発だ、自分たちがやらなければ」という使命感を持つ人も多いと聞きます。

崩壊した原発での作業は、被曝を伴います。このことが、あと何十年、何百年続くのでしょうか。

福島第一原発から空間中に放出される放射性物質の量は、2017年と2018年の比較では2倍に増えているという発表がありました。東電による、がれき撤去などの作業の中で放出されているものだということです。昨年から始まった排気筒の解体作業、日々繰り返される汚染水対策の作業、これから想像もつかないほどの危険な作業が行われていくことでしょう。

起きた事故現場の収束作業は、とても絶望的な問題です。そうならないように備える、という選択肢がありません。そして、そこに私たちが守りたいと思っている世代の人々がかかわり、作業を引き継いでいきます。 Chernobyl 原発事故の収束作業には、事故後に生まれた人々が大勢かかわっているというドキュメンタリーを見たことがあります、それはこの日本でも行われていくことです。

福島原発事故災害から9年が過ぎました。  
この3月11日から10年目の年にに入ります。  
10年経って、福島がどうなっているのか？日本がどうなっているのか？

時の経過とともに、人々の問題意識は風化し、見えない放射能は「何になかった」かのように忘れられていく中で、子どもたちの通う道をととのるために、どうしたらいいのか、何ができるのか、たらちねでの日々は、その模索の連続です。

原発が事故を起こしてしまった絶望は、どんな対策も後手でしかなく、大人たちが子どもたちに捧げられる光はあるのだろうか、あるとしたらそれは何なのだろうか、その模索の繰り返しです。

この絶望の中で、自分たちにできることを「ハナ歌」を歌いながら、できるところまでやっていこうと私たちは日々を送っています。

寄稿はこちらでもご覧いただけます

<http://coalitionagainstnukes.jp/?p=13852>

鈴木 薫

福島県いわき市に生まれ、現在も在住。2児の母であり、認定NPO法人いわき放射能市民測定室たらちね・事務局長。



### 編集後記

未知のウイルスであるコロナ感染拡大防止のため、予定していた「0308原発ゼロ☆国会前大集会 -福島・輝く未来へ-」の日程を延期した。また、金曜官邸前抗議も今現在(3月中旬)、活動休止している。クルーズ船対応の初動から安倍政権の後手後手の対策を見るにつけ、9年前の原発事故の時に現政権だとどうなっていたら、安倍政権ではなくて良かったと、多くの人々が思い至っている。

東京五輪の開催も危ぶまれているが、五輪反対派の中にも「コロナ対策で経済が停滞しているので五輪開催はやむをえない」という論調が見受けられる。しかし、そもそも安倍首相が「原発事故はアンダーコントロール」と嘘をつき誘致した「復興五輪」は、その出だしの虚偽とともに認めてはならないのではないか。政権が有能であれば、ほかの施策を講じられるはずだ。

認定NPO法人  
**いわき放射能市民測定室たらちね**

<https://tarachineiwaki.org>

2011年3月11日の東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故を受けて、市民が自ら立ち上げた放射能測定室。子どもたちの健康と未来を守り、地域の人々の役に立つ測定室を目指して日々、努力している。2011年11月13日開設。

#### 事業内容

放射能測定(セシウム134・137、ストロンチウム90、トリチウム)/福島県沖海洋調査/福島県内および近隣地域での甲状腺出張健診/福島の子どもたちの転地保健の実施(沖縄球美の里、オルトディソニーの2団体と連携)/たらちねクリニック運営/あたりえ・たらちね 福島の母子のこころのケア事業

